



入選

大悲、姐御観音千手の祈り

野瀬町

水沢 郁

フジワラユウトくんのご両親が製造販売しているパン屋さんに行ったことがある。

ぼくは当時、大学を出て、夜間定時制高校勤務の常勤講師三年目だった。フジワラくんは、二十歳の新入生で、ぼくの受け持つ二年次クラスではなかったが、ぼくは一年生の理科も担当していた。

これから夏休みに入ろうかという七月中旬、体育祭の反省会を兼ねたバーベキュー大会を中庭ですることがあって、味付きバラ肉やフランクフルト、おにぎりに焼き野菜とみんなであらふく食っていたとき、パンの差し入れがあるということで、そこへ行ってみた

井上次雄
杉山啓志
選

のだが、それはコッペパンの形状で、食してみると表面はフランスパン風、中身はロールパンの味わいに似て、しかも奥が深く、焼き上がった具材を挟み込むと実においしかった。百個近くは用意されていたろう。聞いてみると、フジワラくんの家がパン屋を営んでいるということだった。市販価格は一個七十円ということだが、もちろんここは無料で、「売り切れ」寸前だった。もう少し食べたいな、という思いはあったのだが、満腹だった。

八月下旬に夏休みが明け、前期末試験ももうすぐだという九月半ば、ある朝急にフジワラくんのパンが食べたくなった。なんでだか分からない。それでその日の授業後、フジワラくんを探してみた。

「フジワラくん、パンやさんはなんじからやっていますか。あさ、はちじくらいからですか」
「ハイ、ハチジニジュップンカラヤッテイマス」

それで金曜日、だいぶ早起きしてそこに向いた。パンはやはり焼きたてがいい。最寄り駅に着いたのは、八時三十分だった。朝のラッシュの潮目で、遅刻登校に開き直った高校生たちも多く、早朝の緊張感はもうなかった。

駅を出てみると高速道路のジャンクションのまった中で、側道や市道が田畑を虫食う形で、くねくねと縦横に走り、高速道の取り付け道路の下もくぐるものだから、ちよつとしたアップダウンもあって、ロードバイクリースもできそうだった。

スマホの位置情報で場所を確認しつつ、目的の場所にたどり着いたが、そこは外壁が灰白色の倉庫で、老舗を思わせる豆腐製造所の名称が大きく書かれた看板がスレート葺きの屋根に掲げられていた。ぼくはあたりを歩きつ戻りつして、確かにここなんだが、という思いで、近くの畑に出ている男に場所を尋ねてみた。

「パン屋さん？ ああ、ブラジルさんね。あれですよ」

男は高速道からも見えるように設置されているあの看板を指さした。なあんだという気もしたが妙に納得した。中でパンが作ればそれでいいのだ。

再度、足を運び、入り口らしきところでの

ツクして「こんにちは」と声を掛けたが反応はない。どうもここは販売所ではないのかもしれない。でもいつもここにこ微笑んでいるフジワラくんがウソをつくわけなし、九時前には何かの動きがあるに違いないと、時間つぶしに周辺をブラブラして、また戻ってきた。

すると、建物のすぐ外に白いシャツの中年男性が出ていて、ストレッチをしている。やはり、中に人がいたのだ。ひと仕事終えて、外の空気を吸いに出てきたのだろう。

「こんにちは。ここはパン屋さんですか」

ぼくは思いきって声を掛けた。

「はい、そうですよ」

フジワラくんのお父さんに間違いない。風貌がそう教えてくれる。

「このパンが、おいしいということ、直接買いに来たのですが」

「あ、どうぞどうぞ」

案内された中は、殺風景な工房だった。今、釜から焼き上がったばかりの幾種類かのパンが、ステンレス台の上に所狭しと並び、通路には小麦粉の袋が幾重にも積み上げられている。その横でフジワラくんのお母さんらしき人が、モナリザとエビス様を足して二で割ったような笑顔のままひかえている。日本語が達者でないのだろうとぼくは思った。

「あ、これです、これです。一個七十円ですよね」

「道の駅の直売所とかスーパーのフードコートでは七十円だけど、ここでは五十円がいいです」

お父さんは、あまり商売気はなさそうで、いや、ここまで買いに来るといふ奇特な青年のことについて、すでにフジワラくんから聞いていてサービスしたのだろうか、「いくつ」とたずねた。

「二十個ください」

お父さんは、その数にちよつとびっくりしたみたいだったが、「中にソーセージか何か挟むとおいしいよ」と、ぼくが差し出した大きなポリ袋をお母さんに渡した。お母さんはここ顔で、一つずついいねいに袋に詰めていく。

お父さんは二十個も買ったぼくに気を遣ってこう言った。

「焼きたてが一番おいしいよ。カビ生えるの速いよ、ボーフラ使っていないから」

ボーフラ？ ぼくにはそう聞こえた。

お釣りのやり取りなしのちようど千円だから、お母さんは相変わらずの無言の笑顔だった。ぼくは何も言わずに外へ出た。

ボーフラはあまりにもおかしい。フジワラくんのパン工場を出て、ぼくはしばらく哲学

者みたいにずっとそのことを考えていたが、高速道路下の道路をくぐるとき、はたと気が付いた。ボーフラだ。お父さんの日本語は確かだったし、これはぼくの聞き違いだろう。なんたる失態。ちゃんと聞き取れていたなら、満面の笑顔で別れたのに。

そのときだった。背負っていたメッシュのザックが引つ張られる気配がして、ぼくが身を反転させるや、パンを一つ抜き取ろうとする手があった。

「あたしや、手すけは金輪際イヤなんだがね」

そう言っていくなりパンをほおぼりだした。黒のロングスカートと清楚なブラウスのその人から発せられた言葉とは思えない、乱暴な口の利き方だった。それにしても実にきれいなお人だった。ぼくはただ呆然とそのさまを眺め続けるばかりだった。

「お水はないのかい」

「あ、はい」

と、駅前の自販機で買ったばかりの「深山の霊水」というペットボトルを差し出すと、「このみやまか分かったもんじゃな」と文句を言いながらゴクゴク飲み始めている。

「あの、どういうことですか」

「ここへはね、あんたが、どうでもいいこととちよつと悩んでいたみたいだから、助けに来てあげたのよ」

「え、どういふこと」

「ちゃんとお礼を言えなかつたつて悩んでたでしょ。それに、心の中では、およそパン工房と思えない所と思つてたからこそ、『ポーフラ』なんて言葉が思い浮かんだんじゃない。今からでも遅くはないわ。もどつて行つて、『我慢できずに、今、一つ食べたんですけど、やっぱり、とーてもおいしかったです』とかなんとか言えばいいだけの話よ。さあ」

同意する間もなく、なんだか強い力が背中に働いて、ぼくはドーンと押し出された。

出荷配送の準備にかかつていたフジワラさんご夫婦は、ぼくの釈明みたいな感謝の意を素直に受け取ってくれた。

その帰り、あの妙な女性に会うのもいやなので、同じ道を通つて帰りたくなかつたが、初めての土地だった。少し迷つたが、結局、見覚えのある往路をたどつて歩いていった。

路傍の側溝のへりに腰掛け、キセルみたいに長いタバコを吸つてその人は待つていた。ぼくが通り過ぎようとすると、「あいよ」と放り投げるように霊水をぼくに手渡し、「あたしや、やさぐれ観音でさあ。仏師の失敗作つてことなんだろうねえ。どうにも仲間と反りが合わなくて、京都の三十三間堂から抜け出して来ちゃつたんだよ」とふてくされ気味にそう言った。

「はあ？」

受け取つたペットボトルはカラになつていた。

「あたしたち千手観音一〇〇一体のうち、年に一回、十数体が修理や点検のために三十三間堂から持ち出されるんだよ、近くの美術院という工房にね。あたしの身が補修からそれほど経つちやいなのに、何かの間違いか、どういふわけだか、またまたあたしの番が回つてきて、外に出されたから、夜中に美術院を抜け出してきたのさ。それが二十五年前。あのときは本当に、せいせいしたよ。あの押し黙つた世界で、大人しく慈悲の仏相をしてゐるつてのは、耐えられたもんじゃない」「大丈夫なんですか、そんな大事なところから抜け出てきたりして。早くお帰りになつた方ほうがいいんじゃないですか」

ぼくは、また厄介な人につかまつたものだと、とにかく彼女の話の流れに堰堤を築かねばとの思いだつたのだ。洪水はいやだ。

「放浪しているのさ、放浪。あたしやね、作者名の銘記もない。ボンクラ仏師のへつぽこ弟子が作った出来損ないだろうよ。よくもまあ、あのお仲間に入れてもらえたものだと思分でも思うよ。千のうちの何号尊なんてナンバリングされてゐるけど、ま、これはね、IPアドレスみたいなものだから、内緒だよ」

何もそこまで聞いてはいないけど、とは思つたが、ぼくは千手観音の名をかたる人の話に任せていた。こういう人も世の中にはいるのだ。十一面のはずの顔は一面だし、手も二本だけだ。「妄想」という言葉がどこかに入つてゐる精神の疾患を抱えている人なのだろう。

「ところで、あんた。どこに住んでゐるんだい。これも何かの縁だよ。しばらくあんたんちで過ごしてあげるから」

どこでどういふ縁があつたのか、さつぱり分からない。いきなりぼくの買ったパンを引つたくるようになつて取り上げ、ぼくのごく個人的な迷い、取るに足らない躊躇に対し、悩みの解決とばかりにお節介の言葉を発し、おまけに百六十円もした「深山の霊水」を飲み干してしまつただけじゃないのか。でも、従姉みたいな、叔母さんみたいな人と、ちよつと言葉はきついのが難だけど、整つた顔立ちのスラリとした美しい人と同居するのも悪くない。いや、この人は他人なんだし、そうなれば同棲だ。妖しい雰囲気もある。そんなふしだらな考えも頭をよぎつた。ぼくは彼女の乱暴な提案を受け入れることにした。いい？ あなたがあたしの言うことに、ん、なんて茶々入れたら終わりだよ、あたしは大砲ぶつ放すから。

ずつと後になって思い至ったのだが、彼女はcannonのつもりで言ったのか、こんな駄洒落みたいな確認で、ぼくは千手観音さまと過ごすことになった。結婚ではない。昔BSで観たアメリカ映画で知った言葉だが、ステディだ。固い契り。特別な二人、いや、一人間と一観音、しかも千本の腕を隠し持っている。

でも「ん」とは、肯定の「うん」なのか、疑問の「ん？」なのか、大砲をぶつ放すとはどういうことか。よく分からないままのぼくの同意だ。今さら確認のしようもない。それは、きのう作ってくれたビーフカレーの肉を炒めるとき、大蒜を入れたか、それはなまの大蒜のすり下ろしか、ハウスのチューブ入りかと確認するようなものだ。人間が小さい、そう思われなくなかった。

六八一号尊は三日坊主だった。

だいいち内緒だと言っていたこのIPアドレスを同居して何日も経たないうちに軽々しく打ち明けてくれたのだ。それに最初の頃こそ、あんたんちに居候してやっているんだからね、ま、朝ご飯くらい作ってやるよと、ぼくのマンションの小さな冷蔵庫の食材やキッチンを器用に使い廻して、ご飯とみそ汁、それに小料理屋の突き出しふうの一品に漬け物

を供してくれ、特に漬け物は、これが浅漬けで実においしかったのだが、それが日に日に古漬けみたいになり、とうとう、ほうれん草の白和えから始まった手の込んだ一品に代わって、賞味期限切れ間近の三パック八十円ほどの納豆も登場し、一週間もたつとヤマザキのダブルソフトと生協牛乳だけになり、観音さまは、京都人はパン好きなんだよと言いつつ放った。

彼女の外出は、ぼくと相前後しての正午ごろだった。ぼくに鍵を閉めさせるか勝手に先に出て行くかは、その日の気分のように、出て行く先はどこなのか、外で何をしているのかは言ってもくれなかったし、聞ける雰囲気でもなかった。いくつになっても親の言うことに聞く耳を持たず、正業にも就かない、ちよつと捨て鉢な道楽息子みたいなものだろう。

「フン、うるさいわねえ」というのが、動静確認に及ぼうとする場合のぼくに對する、彼女の口癖となりつつあった。「なんでぼくのところに」と正面切って聞きたいことは何度かあったが、稀有な女性に同居してもらっているくせにとの、当人からのきつい反論にあいそう、それは口にできなかつた。

ぼくのマンションは最寄り駅から近く、その経路に銀行やスーパー、コンビニもあり生

活に便利なのだが、築三十年は経っていて、だから子どもが巣立った後の古巣に、老齡の夫婦、あるいはどちらかが住むだけというケースが意外に多い。そんななかで、ぼくの家は北西角の変形2LDKで、変形はいいのだが、玄関とキッチンのある辺りは午前中は光が入らない。陰鬱なところで口に入るものなど作れない、というのが観音さまの言い分だ。

ぼくの性的本能が理性になれなれしく同意を求める休日前の夜などは、観音さまも酒につきあってくれ、いくぶんリラックスしているようで、ぼくに對してけつして拒否的ではなかつたが、ふしだらでもなかつた。

ふだんあんなに蓮葉な口を利いているくせに、仏性というのか、何にしろオスとメスとの直接的な獸性を避ける神聖さがあつた。ぼくの身に、観音さまの白アスパラの指がそつと触れるだけでぼくはエクスタシーに達していたし、そのときに観音さまから放たれるオーラは、ほの明るく、それでいて燦然と輝いて見えた。

祈りというのは何かを待ち続けることじゃない。それを積極的に求める心のあり方なの。あたしはほんらい合掌の手（本手）を合わせて四十二本なんだけど、今、脇手で残っているのは十七本。あなたが本心に心から祈って、あたしが必要なときには本物の観音さまの格

好になって現れるわ。手すけてあげる。

彼女はさとようにそう言った。

観音さまが女性であるのか男性であるのかは、現象としての次元であるらしいということも知ったが、今のこの現象は変わってほしくないというのが正直な気持ちだった。

「ああ、やだやだ。昨日、また手すけてやったよ。又一本、なくなっちゃったよ。この一本が二十五世界に及ぶ幸と思えばうれいけどね」

ぼくの部屋に転がり込んできて以来、そう言うのが観音さまの毎朝だった。本当だろうか。これまでに失った腕は二十数本どころではなからうに。と、ぼくの疑問を察したかのように観音さまはこう言った。

「一時貸しやリースもあるんだよ」

「手をレンタルするんですか」

「そう、あたしの昔の男はね、これが喧嘩早くてね、神仏の手が借りたいというので、ちよつと心配だったけど、ちゃんと返しておくれよと言って二本貸してやったんだけど、やっぱり立ち回り演じちゃってさあ、戻ってきたときには、二の腕から手の甲まで青アザや出血痕の手傷がいっぱいで、修復が大変だったよ」

「本当ですか」

ぼくは、ぼくが踏み込むことの出来ない武勇伝を聞かされているような気分だった。

「ウソついたってしかたないでしょ、もつとあるのよ」

観音さまは調子づいてきたようだ。目が潤っている。

「ひどい亭主持ってサラ金の取り立てに追われている四十女が泣きついてきたことがあってさ。手取り早く金を得るには、水商売か、ちよつと勇気はあるが風俗産業。でも、どちらにしたって不器用なその女は『手練手管』が必要だから、取りあえず三ヶ月の契約で二本リースしてくれてね。即物的にもあたしの手は白魚のようなしなやかさだから客には好評だったらしいけど、戻ってきたときにはやっぱり複雑な気持ちだったねえ。それ以来、むやみやたらと人に手を貸すもんじゃないと痛感したよ。あたしにもポリシーがあったからさあ。あるオバサンからブランド物のバーゲンがあるからって、二時間十本のレンタルを申し込まれたことがあったけど、あたしは承知しなかったよ。私を手を貸すのは、その人の死活問題に関わる場合だけなんだよ」

「……」

今日はテーブルの上にはドーンとバナナの房が置いてある。ずいぶん簡素化されたものだ。以前はアボガドとパプリカをからめたよ

うなサラダまで作ってくれたというのに。

「お手すけは金輪際イヤじゃないんですか」

「言葉のイヤってもんだよ。あんただって、そんなに大したことじゃないのに、日々の営為に、ああ疲れた、大変だなんて言ってるじゃないか。観音がね、困った人を助けなきゃ、観音やってる意味ないじゃないか」

それはそうだと思う。でも……。

「昨日はどこへ行っていたんですか」

「あんたはリオのコルコバード丘のキリスト像を知ってるかい」

「リオってオリンピックがあつたりオデッサネイロですか。そう言えば、両手を広げたキリスト像がそびえ立っている高い丘がありますよね」

「そこがコルコバードなんだよ。昨日そこへ何年ぶりかで出向いたのは、右腕のメンテナンスをせざるをえなかったから。見ると、やっぱり前のはもう限界。で、代わりに腕をまた置いて来ちゃったよ」

ぼくは頭がくらくらしてきた。どこまでこの人の与太話に付き合えばいいのか。

二〇一四年一月十六日のリオは、ものすごい悪天候で何万回もの稲妻、そのうちキリストの右腕に強烈な落雷があつてさあ、緊急のヘルプがあつたから、仏だけど神業で飛んでいって、腕を取り替えちゃったのさ。そのと

き、あのキリスト像が一瞬、あたしの観音姿になったのを誰も知らない。いや、私の姿を目撃した少年がたった一人だけいる。それが、あのパン屋の息子さ。あの落雷の後、今から二年前、出稼ぎに出ていた親に呼ばれて日本にやって来たんだよ。日本語はへたくそだけど、誠実ないい青年だよ。あのときあんなに出会ったのは、あの青年の最近の様子も知りたくてさあ、それであんたともお知り合いになったというわけさ」

「あのう……そんなひどい天気なら、天気予報のトピック映像かニュース用に撮影されていたんじゃないか。たとえ一瞬でもキリストが観音さまに変わったなんて、人口何百万人も大都市だから、目撃者はたくさんいるはずですよ。そんな話、聞いたことない……」

逆鱗に触れるのを承知でぼくは言った。美しい人にはトンデモ話をしてほしくなかったのだ。

「あんたも人の話を聞いてないねえ」

あきれ果てたという風情で観音さまはため息をついた。

「たった一人を除いて誰も知らないと、今言ったばかりじゃないか。多くの信仰心厚い人の中から、奇蹟に等しい僥倖が与えられるのは、限られているのさ。このときは、それが

あのフジワラくんだったのさ」

「……いつかフジワラくんに聞いてみます」

「勝手にするがいいさ。それにあの子はもう忘れちゃっているだろうよ」

そろそろぼくが引き下がる潮時だった。

ところがフジワラくんは考えるところがあつて、一年も経たないうちに学校をやめることになったのだった。そのことを聞いたのは、年が明けてすぐだった。

単位が取れるのは、何科目あるのだろうか。学校では、実技科目はもちろん、授業に出席することが最優先される。ふだん真面目に授業プリントに取り組んでいれば、たとえ定期テストで0点を取ろうが、単位を与えるよう配慮している。フジワラくんの授業態度は申し分なかったが、彼は後期になって欠席がちになっていった。これはどうしようもない。

フジワラくんが久し振りに登校するというその日は、担任と進路変更の手続きなどについて懇談する予定の日だった。しかし、フジワラくんは来なかった。

その日の始業前、フジワラくんを見かけないかと、焼けて凍てついた西空をぼんやり眺めていたぼくは、以前交わした会話を思い出していた。炎色反応の実験準備をしていた理科室に、フジワラくんがだいぶ早くやって来

た日だった。

ぼくらはとりとめのない会話をした。好きな音楽、好みの食べ物……。しかし、相手が元来はにかみ屋で無口なフジワラくんのこと、会話は長続きせず行き詰まる。次の話題を考えていると、フジワラくんの方から思いもかけないことを言ってきた。

「センセイ、JRノカモツレッツシャノウンテンシュニナルニワドウシタライイデスカ」

「それで、あんた、なんて言ったのさ」

半年も過ぎようかというのに、観音さまはまだ居座っていた。

マンションの管理人や住人たちには、ぼくの家に姉か親戚の女性が同居しているくらいに思っていてほしいと、そう思っているのはぼくだけかもしれないが、ぼくはいつ頃からか部屋に入るとき、人目を気にするようになっていった。

「乗務員の場合、高卒資格があれば、国籍の問題は関係ないと思うけれど、そこに至る過程がややこしそうで、先生、よく分からないから、直接JRの採用担当の方に聞いてみれば、と言いました」

「……あんたはつれない野郎だねえ。担任でなくても、今言ったことを自分で調べて教えてあげればいいじゃないか。呆れたよ、まったく」

凶星だ。ぼくは黙り込むしかなかった。

「それでも教師かい」

観音さまは冷たく言い放った。

次の朝、ご飯にワカメと豆腐のみそ汁、シヤケに納豆卵焼き、それに野菜サラダという、理想に近い朝食が準備されていた。

が、観音さまの姿は、突如ぼくの住まいから消えていた。理由はよく分からない。フジワラくんに対するあの言い方に幻滅したのかもしれない。

しかし、あの観音さまは、土台、気まぐれだ。

話はずいぶん飛ぶが、ぼくはその一年後に高校の常勤講師の職を辞し、森林情報士の資格を取り、また環境保全団体にも加入して、自然観察指導員になるための講習会にも参加した。性的に人間相手の仕事は向いていないと、かねがね思っていたからだ。

しかし、資格を取得しただけで、またボランティア活動めいた日々でメシが食えることもなく、ほどなく貯金も底をつき、ぼくはある森林組合に就職した。

山林管理員ということだったが、仕事の実態は、樹木の伐採・搬出、苗植え、枝打ち中心の肉体労働だった。シヤレではないが、この仕事でメシは食えるようになったが、それ以上にメシをよく食った。でないと、やって

いけなかった。

ほっとするひとときは、仕事が終わったときで、時たま仕事仲間と飲みに行くことも楽しかったが、仕事中に野生のサルやシカを見かけることもあり、これはしばし心を和ませてくれた。

この仕事について三ヶ月経った頃だったろうか、鈴鹿山系からびわ湖に流れ込む河川の上流で長期労働をしていたとき、生きものの気配、いや人の気配を感じ取ることがよくあった。

あるとき、ドッカーンと、ダム補修工事か何かの爆破音が遠くで聞こえた。その後、ずっと静寂が続いたが、ふと誰かにじっと見つめられている気がして、チェンソーを止め、振り仰ぐと、すぐ近くの樹上にすらっとした細身のサルが居た。こちらを見下ろしている。ぼくがそいつを見つけたとき、そいつはフンと顔を背けたような気がした。

「やってるね」

確か、サルがそう言った気がする。そうしてムササビのように木々を渡り飛んでいく。ニューギニアやアマゾン河流域の密林に住むサルのようにだった。少なくともニホンザルの移動の仕方ではない。優雅で華麗で、木にとどまるより空中にいる時間の方が長かった。木々の間を飛び移るとき、残像のように姿を

残していく。着流し姿に似ていた。

ぼくは観音さまだと確信した。サルが消え去った方向に向かって、思わず大声を発していた。

「お元気ですかあ、あの観音さまですよねえ」
人里離れた溪流沿いの山間に、ぼくの声は吸い込まれていった。

同僚には悪かったが、ぼくはその森林組合の仕事も五年で辞めてしまった。一言で言ってもぼくにはきつかったのだ。自然や森林に関わる仕事をよしとするのはいいが、自分の腹の据え方にも疑問を抱くようになってきていた。おのれの気甲斐性のなさにも幻滅してきたというところだ。

それからの話もあまりしたくないが、失業による無為と生来の酒好きのせい、ぼくはアルコール漬けになってしまったのだ。

朝からの別世界は格別に魅力的だった。アルコールを限界まで試すという、言い訳にならない自分への言い聞かせもあった。清涼飲料水を飲むくらいなら酒の方が安い。

特に初夏の頃なんか、アルコール度数の高い缶酎ハイやコンビニ各社のプライベートブランド焼酎を朝から飲み続ける日々が続く、飲んで眠り目覚めては飲むという生活だった。青葉若葉のひかりをうつつとうしく思いな

がら、ぼくはコンビニや酒の安売りショップやスーパーに通った。いい若者がという引け目もあって、自分なりに店のローテーションを考えていたが、酒は、それも無分別な飲み方は欠かさないというルーティーンだった。

やがて左右の腰骨に床ずれもできた。酒好きだがアルコールに弱い体質だったのか、初秋になると下痢が慢性化し、目眩やふらつき、羽ばたき振戦もひどくなってきた。紙がめくれない、レジで小銭が取り出せない。足首や足の甲が醜くむくみ、食欲がほとんどないのに腹が張ってひと月で体重が四キロも増えた。

気にはしていたのだが、ようやくわが身の異常事態に気付き、ネット検索でアルコール依存症の症例でもある「腹水」にたどり着いたとき、心底これではいけないと、みずから精神医療センターのアルコール専門外来に駆け込んだ。アルコールの蓄積年数も浅い年若い身で恥ずかしかつたが、そんなことを言っている場合ではなかった。

人に言われてではなくご自身みずから来院したのは立派だと専門医は評価してくれた。しかし、あなたの場合、脳には来ていないようだが、胃腸の異常や肝硬変など内臓疾患の検査が先でしょう、まずは総合病院で診察を受けなさいとのことだった。その頃はまだ

アルコールに心身を乗っ取られていたぼくは、「先生、毎日缶ビール一本程度でもだめですか」と訴えたが、医師は「あのねえ、あなた。脾臓もある。このままでは正月も迎えられないよ」と宣告した。

総合病院の消化器内科で受診、精密検査を受けた。肝硬変の一手前だった。胃腸や脾臓はまだ、そんなにいかれていなかった。それと並行するかたちで、病院の集団精神療法や地域の断酒会にも参加し、アルコール依存症専門医の投薬や助言を素直に受け入れた。医者嫌いのぼくにとっては考えられないことだったが、それだけ本気だったということだろう。それまでにはない危機感を持っていた。立ち直りたかった。

そうして、ごくたまにスリップすることはあったが、断酒の日々が連続し、数ヶ月たつて回復の光明が見えてきた。

次の職を模索していた三月、フジワラくんの夢を見た。

フジワラくんは濃紺の電気機関車EF510で二十両の貨物車を牽引している。その日の乗務は、札幌福岡間二一〇〇キロ以上を四十三時間かけて走破するというJR貨物の最長距離列車だった。もつともフジワラくん一人が全行程の乗務員であるわけはな

く、彼は敦賀から吹田貨物ターミナルまでの九人目の乗務員であった。南行きは湖西線經由となる。この貨物列車は本州では乗務員交代の駅を除いてノンストップのため、フジワラくんは定時運行を守り、積み荷のタマネギやジャガイモとともにひたすら走るだけだった。吹田到着予定は午前零時三十分だ。

敦賀を出て愛発あらかちの山々を抜けると、暗闇の中から、左手にびわ湖、右手に比良の山並みが浮かび上がってくる。

しゃべる相手もない一人乗務だから、この仕事は無口なフジワラくんにはとつても都合がよい。フジワラくんは、それまで経験してきた仕事と比較して本当に自分に向いていると思つて鼻歌まで出てきそうだった。で、眠気覚ましに「第一閉塞進行」などと大きな声を出し、おおげさな手振りで指差し確認をしている。

この時間、新快速と行きあうこともないし、金沢行きの最後のサンダーバードもすで見送っている。湖西の鉄道を何ら停車することなく大勢の自分を引き連れ、高速で疾走しているのは自分だけだった。孤独は友だ。湖と山々にはさまれての走向は至福のひとつときでもあった。

と、狭い運転席の背後に人の気配がし、「やってるね」と言ってくる。助手席からではな

い。

フジワラくんは動じない。信号や標識を見落としてはならないし、前方と左右確認の他は目の前の計器類だ。彼は振り向かない。幻聴だとも怪奇現象だとも思わない。

「トイレは大丈夫かい」

フジワラくんは酒を飲まないが、乗車十時間前から飲酒禁止だし、食事や水分摂取にも気を遣っている。万一どうしてもトイレが我慢できなくなったら、機関車を動かさないようにして、運転指令の許可を待てばいい。だから大丈夫です、と前を向いたまま声に応えようとすると、また声がする。

「美術院を抜け出して放浪を始めた頃だった。キミは知らないだろうけど、阪神・淡路大震災が起こってね。その時に、このあたりで徐行したり、長時間停止したりしていた貨物列車を見かけて、その乗務員に手を差しのべてやったことがあるんだよ。十数時間もまともに動いていなかった。あのときは交代要員もなく、大変だったよ」

言わずと知れた観音さまの口ぶりだった。観音さまはしゃべり続ける。フジワラくんは振り向かない。

「機関車が動けないときにコンビニへ行って食品を買い出したり、それもままならない所で運行を停止した場合は、民家を見つけては

事情を説明して、食料もったり被災地の情報を得て伝えたりと、大車輪の活躍さ。キミみたいな若い乗務員だったけど、可愛くて肩を揉んであげたこともあったよ。その彼も振り向かなかったけどさ。キミによく似ていたよ」

一瞬フジワラくんの頬がゆるんだようだったが、やはり彼は振り向かない。

「地震と言えば東日本大震災のとき、あたしやカムチャッカ半島の露天風呂に浸かっていたんだがね、大地震が起こったってんで、三陸の沿岸部に駆けつけたよ。そうそう、ひどい雷雨の知らせを聞いてリオに駆けつけたときと同じ、超高速のマッハ。でも、そのときは三十分は経ってしまっていてね、もう津波が襲いかかっていた。あたしや、ありつた腕を外輪船のようにグルグル回しては荒れ狂う黒い海のうねりをかき分けかき分け、流されていく人を見つけては何十本もの腕に抱え抱えして、どれほどの人命を救ったかわかりやしない……それでも海の藻屑と消えていった大勢の人々を救えなかった。思い出すと泣けてくるよ」

観音さまはしばらく押し黙った。フジワラくんも相変わらず無言のままだ。

機関車は瓦礫の山をガシガシ踏みしだき、生活臭漂うありとあらゆる物を巻き込んだ濁

流の中へと進んでいく。機関車はゆらゆら揺れながら障害物をゆるりとはね除け、イルカが海中を遊び泳ぐように進んでいく。

「あたしには予知能力はない。あたしに限らず、神や仏に未来を見越す能力はない。勘や、それまでの経験を元に、ある程度の未来の予測はできるけれど、突発的な出来事に対しては、それこそ一寸先も分からない……」

フジワラくんは我が身に降りかかった出来事を思い浮かべるのだった。

父と母とフジワラくん、それに今では普通の日本人と変わらない会話能力を持つ幼い妹を連れて日本に行くという話が急に持ち上がったとき、フジワラくんは内情を知らなかったが、祖母のアケミは「ユウト」だけはこのに残しておくれよと訴え続けた。

「夫のカルロスが亡くなっているのに、男手のユウトまでいなくなったら私は本当にひとりぼっちになってしまう。カルロス、カルロス、なんとか助けておくれよ」

アケミはロザリオを握りしめ夫の遺影に語りかける日々が続いた。

結局、祖母の面倒を見るというかたちでフジワラくんは生まれ故郷に居残ることになった。近所の人にも助けられながら、十三才のフジワラくんは五年間、祖母アケミとの暮らしを続けた。しかし日に日にアケミの言動は

おかしくなっていくのだった。やがて突然の家出や彷徨が始まった。近所のアミーゴたちが見つけてくれ保護してくれることもあったが、フジワラくんの負担は増えていくばかりだった。学校へ行けなくなるときもあった。フジワラくんがそんな毎日に途方に暮れかけたとき、事が起こった。

リオじゅうが猛烈な雷雨に襲われたあの夜、アケミはコルコバードの丘近くの水路で息絶えていたのだ。うずくまって動かないアケミを発見した人も、駆けつけた警察官も、その死を確認していた。

その頃、祖母を捜しに外に飛び出していたフジワラくんはキリスト像の異変に気づく。いつも自分たちを見守っていてくれているあのキリストが見たことのない姿に変じたのだ。雷雨に打たれながら、フジワラくんは一瞬見とれてしまった。東洋風の慈悲の目に吸い込まれそうだった。が、気のせいかと思わせるほどの刹那で、姿はキリストに戻っていた。

疲れ果てて自宅に戻った濡れ鼠のフジワラくんを追うように、警察から連絡が入った。息が止まっていた祖母アケミが、閃光に打たれ奇蹟的に息を吹き返したというのだ。今警察署にいるから引き取ってくれというものだった。

その後アケミは、サンパウロにいるアケミの妹一家が面倒を見るということになり、フジワラくんも日本に行くことになったのだった。

来日以来フジワラくんは仕送りを欠かしたことはない。

「あのときのコルコバードの丘には、あたしが立っていたんだよ」

フジワラくんは振り返って微笑んだ。

と、機関車は今度は穏やかに波打ち際に滑り込んでいく。フジワラくんも海水に浸っていたのだが、水は体液のような温かさでフジワラくんの体になじんでいた。しばらくすると機関車は海辺の露天風呂に浸かって停止した。貨車たちは積み荷をこぼすことなく、夜明かりの中で、海にプカプカ浮かんで見える。機関車の近くには妙齢の婦人がいて、胸の辺りまで湯に浸かっていた。

フジワラくんは、この世に生まれる前にか体感できない、ある懐かしい場所にいるような気がした。

女は立ち上がり、湯水に濡れた絹の衣装のままフジワラくんに近寄り、手を差しのべてくる。いくつもの腕からしたたる水滴に月光が弾かれた。

フジワラくんは歓喜の警笛をならそうとした。

——トイレは大丈夫かい。

女の声がしたような気がした。

……はだれ溶けゆく夢の余韻にひたりながら、もう一眠りできる時間だとぼんやり思っていたとき、スマホに一件のメールが入ってきた。こんな時間にメールはあり得ない。思い当たるふしもなく、迷惑メールならフィルターにかかるはずなんだがと不審に思いながら開いてみると、登録名は「cannon」で、件名には「ぶつ放す」とあった。ぼくの目頭は急に熱くなってきた。

本文にはまず「いつまでぐだぐだやっているとんだい。そんなあんたは見ていられないよ。ぶつ放すよ」とあり、続いて「あたしや、悩める衆生のために今やすべての手を使い果たしてしまったよ。もう千手千眼のなただの役立たずさ。三十三間堂に六八一号尊はもう帰ってこないと連絡を入れておくれないかい。そしてあんた、東の空を見てごらん。空に浮かんでいるのが今の私の姿さ。明けない夜はないんだよ」とあった。

ぼくはあわててジャンパーをはおり、マンションの裏手にある坂の上にハアハア駆け上った。そして、しののめの空を見やった。ちようど日の出の時間で、ほぼ真東の山並みに

は、朝焼けの後光に照らされた雲が棚引いていた。

観音さまの横雲は臥仏の様^{さま}で横たわり、ぼくを手招いているようだった。床ずれなどできそうにない軽やかさが感じられた。

観音さまは刻々と姿を変え、峰から離れていく。口の中でホロホロとろけるクツキーミたいなはかなさだった。

ぼくはポケットからスマホを取りだし、返信をした。

「了解です。あの朝ご飯、とーでもおいしかったです。ありがとうございます」

もう少し、洒落た文言はないものかと、おのれの機転の利かなさを呪いつつ、再び真東の空を望む。

やがて横雲はいくつかにちぎれていく。

そうして船着き場から向こう岸に向かって横並びに繋留されていた小舟が、次々と出航していくように消えていってしまった。

スマホは、送信不能の旨をぼくに伝えていた。

了

(評) 酒の飲み過ぎで肝硬変の一步手前まで来てしまった「ぼく」と、妄想の中に現れた観音さまとのやりとりがコミカルである。全体の構成に工夫の余地はあるものの、生きることに伴う悲哀を、軽妙でありながらよくコントロールされた文体で見事に描き切っている。



《総評》

小説部門の応募数は、彦根市民文芸としては過去五年間で最も少ない一編にとどまり、いささか残念な思いをいたしました。しかしながら、今回の応募作品は、なかなか手の込んだ仕掛けが用意されていて、読みながら高揚した気分を味わうことができました。

小説を創作することは、未経験の人にとってはハードルが高いと感じられるかも知れません。しかし、物語の中心となる人物を造形し、その人が置かれている状況を設定して、とりあえず書き始めてみましょう。その人物が何を考え、何を目指して、どんな行動を起こすか。周りにどんな人がいて、どんな会話を交わすか。あなたの想像力はいつの間にか自由に飛翔し始めているに違いありません。作者の個性やこれまでの経験が、その想像力にエネルギーを供給します。

美しい文章を書かねば評価されない、などという気遣いは無用です。飾った文章は読者の胸を素通りします。

物語の始まりから終わりまでの流れを示す設計図を用意して、作者の胸に去来する情景を描写し、登場人物の間で交わされるであろう言葉を記録する、という方法で、まずは一作品を仕上げてみてください。思っていたほ

どハードルは高くなかったな、と思われることとでしょう。その作品を次年度には思い切つて応募してくださいよう、期待しております。

杉山 啓志

